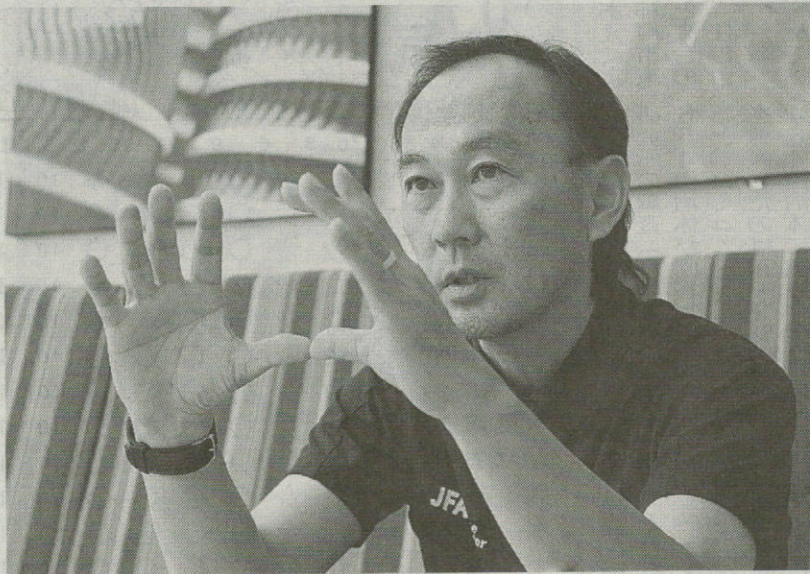


駆ける魂



カンボジアの審判の向上に情熱を傾ける
(写真 CAM photo 石川正頼)

元Jリーグ審判 唐木田 徹 (56歳) ①

2008年からカンボジアでサッカーの審判養成に力を注ぐ唐木田徹(56)の話には笑いを誘うものがある。ある大会に行ってみると、試合前に審判がピッチの端の芝の切れ目でひざまずいた。「お祈りでも始めたのか」と不思議に思っていたら小便をしたんです。トイレならあるのに」

これにもわかには信じがたいが、CKはどちらのサイドから蹴ってもいいものだと思われていたという。「いまだにそれを許している主審がいる。どこでボールが外に出ようが、キッカーが近くにいるサイドから蹴らせてしまう」

プロリーグがあるのに審判の資格制度が整っていない。競技規則を持っていない審判がいて、競技規則そ

カンボジアで審判を育成

「この国では審判の重要性が理解されていないし、審判なんて誰もやりたがらない。罵倒されるから。レッドカードを出すと選手がそのまま家に帰ってしまふ。勝ち負けがつかず、いつも審判が『いくらもらっているんだ』と言われる」

1994年から2007年までJリーグで主審を49試合、副審を211試合も務めた審判がそういふ世界に身を置いている。日本サッカー協会から派遣され、肩書はカンボジア・サッカー連盟のレフェリー・インストラクター。審判の指導、試合での審判アセスメント(評価・採点)、審判を育てる指導者の養成、審判指導体制の構築という重責を背負う。

改革者、有能な若手に門戸

当初、カンボジア人審判の走力の低さに驚いたという。体力テストを課してはなかったというのだから仕方ない。ベテランばかりが重用され、有能な若手への門戸が閉ざされていた。

唐木田は体力テストを導入し、合同トレーニングも行い、テストにパスしない者は試合に割り当てないようにした。「僕の知らないところで不平を言う者もいたでしょうが、公正な評価を求める多数の若手の支持があった」。走れないベテランは消えていった。

とにかく、すべてが普通でなかった。審判のために試合が録画されていないことも困惑したという。映像を見ながら振り返るといふ習慣がなかった。だから「あの判定のときの体の角度は正しくない」と指摘する。

(敬称略)

日本野球機構と米大リーグ機構が協議しているポストリーグシステム(入札制度)に代わる新移籍制度の有効期限が3年となることが9日、分かった。米大リーグのウィンタースミーティングで

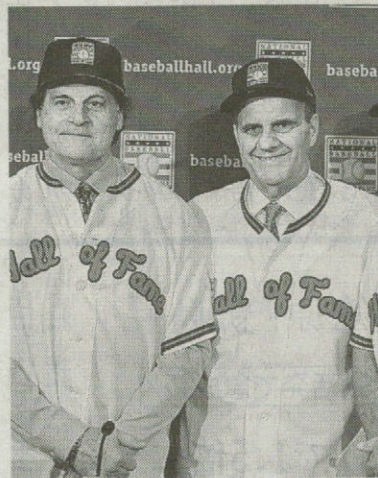
新移籍制度 3年間有効

タで関係者が明らかにし、度の日米間調整は終了し、近く双方の決議機関の承認を得て発効する。

新たな移籍制度は、選手を獲得する大リーグ球団から受け取る移籍金を、2千万ドル(約20億円)を上限とする田中将大投手の大リーグに日本の所属球団が設定し、選手は応じたすべての(レックフエナヒスタへ米

米大リーグ、メッツのアルダーソン・ゼネラルマネジャー(GM)は9日、同球団からフリーエージェント(F.A.)となった松坂大輔投手と再契約に向けての交渉を行う意向を示した。

今季の松坂は8月下旬にメッツに加わり、7試



殿堂入りが決まったトリー氏

れでは技術の向上はおぼつかない。サッカー連盟から2000ドルを出してもらい、ビデオカメラ2台、三脚、DVDレコーダーなど機材をそろえた。

あらゆる面で正常でなかったものを整えていく作業には相当のエネルギーを要してきたはずだが、人柄のせいもあり、唐木田は実に楽しく振る舞っている。そこには改革者であることの自負もつかえる。

何もなしどころに土台が築かれていく喜びもあるのだろう。「低いところからスタートしたので、みんなの伸び方はすごいですよ。教え子のトン・チャンケシアがカンボジア史上初のアジアサッカー連盟(AFC)エリートレフェリーにあど

一步のところまで来ています。

この連載は吉田誠一が担当